



## 子どもたちの逞しさ～集団宿泊教室を終えて～

先週の3日(火)～5日(木)、5年生の集団宿泊教室が実施されました。リニューアルされた金峰山少年自然の家での3日間は子どもたちにとっても私たち教師にとっても、多くの発見があり、成長を感じた3日間でした。

私は、教頭と交代して2日目の午後から参加しました。出発こそ雨模様でしたが、それ以降は天気にも恵まれ、予定されているプログラムをすべて実施することができました。

それらの活動を通して、子どもたちのもつ力のすごさを再確認すると同時に、教師(大人)としての支援の在り方、接し方を考えさせられました。

一例を挙げると…アウトドアクッキング(カレー作り)が2日目がありました。家での生活においては、恐らく子どもたちは何ら苦勞することもなく、お家の人が作ってくれたものを食べていると想像できますが(中には自分で料理をしたり、手伝ったりしている人もいるかも知れませんが)、こと野外において、文明の利器がないところでは、ある程度の苦勞が伴います。

「家庭科で調理実習はあったのかな？」(私) 「いいえ、お茶は入れました！」(男の子)

「なるほど…包丁を使ったことはある？」(私) 「家で、料理を作ったことがあります。」(女の子)

「へー、それはすごいね。なら、大丈夫かな…」(私)

しかしながら、子どもたちの包丁の使い方を見ていると、中には少々危なっかしい子もいます。(ケガしないので…注意して…猫の手で…)と最初に調理の担当教師から伝えられた言葉を思い出し、見守ります。同じ班の子も、まな板の周りで様子を見つめます。玉ねぎ、にんじん、じゃがいも…まな板の上では不安定なものばかり。片手で押さえて、慎重に包丁で切ります。その表情は集中して、真剣そのもの。その一方で、火おこし役の子たちは、薪を準備し、新聞紙、松ぼっくりを設置し、火を付け始めます。スムーズに火が付く班もあれば、消えてしまってもう一度初めからやり直す班もあります。ガスやIHみたいに簡単には行きません。

「お鍋に入れる水の量、気を付けよう。多すぎないようにね。」

具材を切り終わり、鍋に入れた班には周りの教師から、声が掛かります。準備が完了すると、お鍋の周りとは底には、後片付けが少しでも楽になるようにクレンザーを塗ります。どうしてクレンザー？と思う子もいるはずですが、とりあえず苦勞しないように言われたようにしています。(素直に受け入れる…これも大事な力です。)

火にかけたお鍋からぐつぐつと音が聞こえ、沸騰してきました。

「もういいんじゃない？ カレー粉入れて」(火の担当の男の子)

「ちょっと、火が強いから、前の方に鍋動かせる？」(女の子)

すると、器用に火ばさみを使って、ゆっくりと炎がこないところへ移動できました。カレー粉の入ったビニール袋を慎重に、こぼさないように開け、鍋の中に入れました。おいしいカレーの匂いが辺りに広がります。見事なまでの班での共同作業です。一人一人の力が合わさないとカレーは完成しません。

「えー、まだスープみたいだよ。大丈夫かな…」(女の子)

「もう少し待ったら、いいんじゃない？」(火の担当の男の子)

それから、間もなくおいしいカレーが出来上がりました。食事をとる子どもたちに

「うわあー、美味しそうねえー!!」と言うと、

「はい！ とってもうまいです!!」と満面の笑みが返ってきました。



クッキングを始めた時点では、『うわあー、ちょっとちょっと…大丈夫かあ?』と正直思いました。しかし、子どもたちは、自分たちなりに考えて、ケガ等をしないように意識しながら行動していました。失敗した時も、『どうしてうまくいかなかったのだろう?』と考え、友だちと話し合っていました。

もしそんな時、大人が『こうした方がいいよ』『あ、それ、やめときなさい』と先回りして、声を掛けてしまう(命の危険にさらされる時は勿論別です)と子どもたちは、自分で考えなくなります。子どもたちの大事な経験の場を大人が奪ってしまえば、『生きる力』は育ちません。その見極めを的確にしなが、子どもたちの教育にあたらねばならない。そう強く思いました。

子どもの自ら考え行動できる力、逞しさを感じるとともに、教師(大人)の接し方を改めて考えた1日半でした。